イチゴ探偵事務局

真黒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
イチゴ探偵事務局

【Ｎコード】
Ｎ３８８４Ｃ

【作者名】
真黒

【あらすじ】
主人公のイチゴが転校してきた隣の推理小説オタクに巻き込まれ、なんやかんやで事件を解決していく学園系（若干コメディー？）推理小説。

プロローグ

転校生は黒板に桐谷壱期と書いた。
なんて読むんだろう。イチキかな・・・？
「桐谷です」

私はちゃんと聞いてるふりをして、別のことを考えていた。
これも内申キープのためだ。
「水守？」
先生の声。
「あ？あ、ああ、何でしょう、先生」
「桐谷がお前の隣に座るから、面倒みてやれよ」
「あぁ、はい。」

私は横に来た桐谷の顔をじっと見た。
うーん、ルックスは微妙かな・・・？

私は、さっきから気になっていた名前の読みを聞いた。
「ん？名前？あぁ、イチゴ」

え？
うそ・・・
「私もイチゴ・・・」
私の名前は水守苺。
ついでに言うと、神崎中学校の2年生。

桐谷は興味無さそうに、
「あ、そ」
と言った。

朝の会が終わって先生が教室から出ていくと、私は読みかけの本を取り出した。
この本は、次々人が殺されていく連続殺人の犯人を主人公が解き明かすという、ありがちな推理小説だ。
おもしろいのだが、かなりエグい。
悪趣味と思われるのも難なので、ブックカバーをつけている。

「何読んでんの？」
桐谷が聞いてきた。
「普通の推理小説。普通の。」
私は普通の、を強調して言うと、桐谷に見えないように背を向けた。
こころなしか、桐谷の目が輝いた気がした。
「えッ、推理小説？何？」

ははーん、読めたぞ。
こいつは推理小説マニアだな・・・
また厄介なのが隣に来たもんだ・・・

桐谷が覗き込んでくる。
私は読ませるものかと角度を変えた。
するとまた桐谷が覗き込む。
私はまた角度を変える。
そんなことが、休み時間中延々続いた。

激闘（？）の末、私がついに息切れして負けた。
「ふーん、『雪の下連続殺人』か・・・
マニアックなの読んでるね。」
「・・・よくわかったね・・・」
私は桐谷をにらんだ。

「だって、俺、推理小説オタクだし」
自分で言ったー！！
桐谷の目がより一層輝いた。

「それ、おもしろいよな」
「うん、そうだね。」
私はなるべく感情を込めずに言った。
「でも、すげーエグいよな・・・」

はぁ・・・
なんでこんな奴の隣になっちゃったんだろう・・・
名前いっしょだし、推理小説オタクだし・・・
ほんと、最悪・・・

「でさぁ、新しい部活作ろうと思うんだけど・・・・」
「ふーん・・・ってえぇぇぇッ！？」
こいつは何を考えているんだろう・・・

「しょ・・・正気・・・？」
「まあな」
バカだ・・・
完全なバカだ・・・

本当なら無視するところだが、聞いてやろう。
「何部？」
「探偵部。」
「はぁぁぁぁッ！？
何それぇぇぇッ！？」

私の大声に何人かの生徒が振り向く。

「何それ・・・」
「推理小説を読みあさる部。」
「一人じゃ部になんないよ・・・
誰とやんの？」

桐谷は不意に右手をだして、指をさした。
「わッ私！？」
桐谷がうなずく。
「なんで！？」
「だって、推理もの、好きなんだろ？」

ちなみに私はそんなこと一言も言ってないぞ・・・
「ちょッ・・・」
「雪の下（略）を読んでるってことは、かなりの推理小説オタとみた」

うッ・・・
こいつと同類種なのは気に食わんが、認めよう。
休みの日には古本屋へ行き、中古の推理小説を買いあさる日々・・・

「じゃ、放課後、職員室前で。」
推理オタなのは認めたが、誰も参加するとは言ってないぞオイ！

でも結局参加する私ってどうなの？

第一話

結局、私は職員室の前に来てしまった。
桐谷は来ていない。

ぼーっとしていると、隣のクラスの麻川未奈美ちゃんが歩いていた。
割と親友。
割と趣味が合う。
「はぁ・・・」
あからさまに溜息をついている。
「未奈美！」
「あ・・・苺ちゃん・・・」
元気がない。
「何かあったの？」
「私、転校するかもしれない！！」
未奈美がワッと泣きだした。
「え！？どういうこと！？」

未奈美は泣きながら訳を話した。
未奈美の話を要約するとこうだ。
彼女の母親の指輪が無くなった。
それは、父親が結婚記念日にプレゼントされたものだった。
彼女の家は小金持ちで、割と大きな家に住んでいる。
無くしたと思われてもしかたがない。

「でもッ・・・私が最後に見たときは夜だったの・・・
お母さんはもう寝ていたのよ・・・？
朝も私のほうが早く起きたの・・・
でももう朝に見たときはなかったの・・・」

ん？
それって、未奈美が寝てから起きるまでの間に無くなったってこと・・・？
「夜の間にお母さんが起きたってことは？」
「それも・・・ない・・・
お母さんは最近・・・睡眠薬を飲んでたから・・・」
「じゃあお母さんが無くしたんじゃないじゃん！！」
「そうなの・・・でもお父さんは・・・せっかく買ったのにッて・・・それで喧嘩に・・・」

これは・・・事件？
「水守」
桐谷が来た。
桐谷は私と未奈美を見比べて、口パクで、
「泣かせた？」
と聞いた。
「違うから！」

ふっと、頭の中に、桐谷の声が響いた。
「俺、推理小説オタクだから」

うーん・・・こいつなら解けるかな？
私は桐谷にこの事を話した。

「事件だなッ」
桐谷の目が輝いた。
「とりあえず部室に行くか！」
「ッて、えぇッ！？部室！？」
「あぁ、部室。」

どうやって・・・？そう言いかけた。
「これを使ってな」
桐谷が黒い小さなノートを取り出した。
『ブラックノート』

なんだそれはー！！
なんか怖いし・・・

私たちが桐谷に連れて行かれた場所は、階段の下・・・倉庫・・・？
机と椅子が山積みになっている。

「さて、最初のクライアントだ。」
「クライアント？依頼者？」
え、だってこの部は推理小説を読みあさる部じゃ・・・
「そんなの上っ面に決まってんじゃねぇか」
桐谷がにやりと笑う。
「小説じゃなくて現実（リアル）な事件を解くんだよ」
えー！？
は、初耳・・・
未奈美はきょとんと私たちを見ている。
「麻川さんですね。
事件のことは聞かせてもらいました。
さっそくですか、明日家の見取り図を持ってきていただけませんか」
いきなり同級生に敬語で話しかけられ、しかも見取り図まで要求された彼女は困ったように私を見た。

次の日、私が『部室』で推理小説を読みあさっていると、未奈美が紙袋を持ってやってきた。
彼女は紙袋からＡ４サイズの紙を取り出した。
え、それって・・・

「家の見取り図です。」

桐谷が目をキラキラさせながら、
「家具の配置を書き込んでください」
と言った。

数分後、未奈美は書き込み終わった見取り図を桐谷に渡した。
「無くなったと思われる時間は夜だったんでしょ？
みんな寝てたんだよね」
「うん・・・鍵もかかってたし・・・」
「じゃあ、外からは誰も入れなかったってことか」
「あ、でも、みみだったら・・・」
「みみ？」
桐谷は知らないようだが、みみというのは未奈美んちの猫である。
「猫？みみなら外から家に入れたのか？」
「だって未奈美んちの勝手口には猫用のドアがあるんだもん」
「どれぐらいの大きさだ？」
未奈美が手で四角く形をとる。
だいたいノートパソコンより一回り小さいぐらいの大きさだ。
桐谷はメモに、『猫用のドア、縦約２０ｃｍ、横約１５ｃｍ』と書いた。
「そこから小柄な人は・・・」
「無理ですね」
「っていうか、桐谷は誰かに盗られた方向で話を進めちゃってるのね」
「じゃあ、最後に指輪を見た場所は？」
人の話を聞け！
未奈美は見取り図の、居間に置いてある食卓テーブルを指差した。
「この上に・・・」
桐谷は赤ペンでテーブルにまるをした。

「勝手口は居間にあるのか。」
「みみがくわえて持ち出した可能性は？」
未奈美は少し考えて、
「無いんじゃないかな？結構大きい箱だったし・・・」
と言った。
たしかにみみは小さい種類の猫だ。
くわえるのは無理かもしれない。

「箱の特徴は？」
「軽めの鉄の箱だった・・・
軽い割に大げさな箱だったな・・・」
「釣り竿や針金で釣ったりとかは？できない？」
桐谷は人を小バカにするように笑った。
「釣り竿だと猫用のドアから食卓テーブルまで振り上げられないし、
針金だと曲げたら家の中に入れられないだろうが。」
むか・・・
「じゃあ他に盗み出す方法なんてあんの？」
「それを今考えてるんだろ？」
ごもっとも・・・
「そういえば、無くなる前の日にお母さん、指輪を近所の人に自慢
してたような？」
それだ！
きっと犯人はその中のうちの誰か・・・
「あと、無くなった日に、みみが夜帰ってこなかったんだよね・・・
次の日に帰ってきたからいいんだけど。」

キーンコーンカーンコーン・・・
チャイムが鳴った。
最終下校の合図だ。

「今日のところはお開きだ。」
「じゃあ私はお母さんたちにもっと詳しいことが聞けないかやってみるから・・・」
未奈美はそう言ってさっさと帰ってしまった。
「あ」
「何よ」
「わかった、トリックが」
えぇぇッ！？
「明日放課後麻川んち行っていいか聞いといてくれ」
「教えてよ、トリック」
「明日」
「ずるい！教えてよお！」
桐谷は何も言わず帰ってしまった。

本当にわかったのかな・・・
もぅ！
気になって眠れないじゃないの！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3884c/

イチゴ探偵事務局

2010年10月28日07時15分発行